

オペラ座の怪人

第一章

プロローグ 一九九二年、パリの街角で

何時来ても綺麗な色だな、とミロは思った。秋のパリ。マロニエ並木も公園のポプラも全て黄金色の景色の中で、色とりどりの服を着けた人々が行き交っている。聖域ではいささかきつい色調に見えるカミュの髪も、こんな世界ならうまく調和するのも知れなかった。

「何を独りでにやけている？」

突然、ミロの美しい幻想を澄んだ声が遮った。

「にやけている、はないだろう！ 人が折角この風景に浸ってたのに！」

些か気分を害されて声の方を振り向く。続けて文句を言おうとしてタイミングを失ったまま、一度開いた口

を再び閉じる。

目の前に、想像よりも幾千倍も美しく調和した

『^{ルージュ}紅』があった。

「どうした？ 今度は黙り込んで。」

「どうもしないさ！ ばかばかしくなつて反論するのを止めたただけだ！」

「それは悪かった」

カミュは僅かに口元に笑みを浮かべてミロを見た。

ミロのことを知るなら、声を聞くより瞳を見た方が余程確かであることを、カミュは知っている。

「珍しく君の方が先に来て待つていたから、ちよつとからかつてみたくなつただけだ」

「ふん！ 君がいけないんだぞ！ 必ず五分前に来て待つていたりするから・・・」

「分かった。今度から君と待ち合わせの時は時間丁度に来ることにしよう」

・・・しまった。やぶへびだ。ミロはごくりと唾を飲み込んだ。はつきり言って、ミロは待ち合わせの時間というものに間に合ったことがない。教皇などは、最近ミロにだけ一時間早い集合時刻を告げているら

しい（らしい、というの、それでもなおかつミロが集合時刻に間に合った事がないため、事の真偽を確かめるすべがないからである）。

些か見え透いた逃げ方だが、ここはどうやら話題を転じるより他道がなさそうだった。

「……で、何で俺を呼んだんだ？」

「見せたいものがある」

カミュがくすくすと笑いながら二枚のチケットを取り出す。

「……『LE FANTÔME DE L'OPÉRA』さ」

「オペラ座で演るんだ。物語の舞台になった劇場でやるといふのはなかなか見物だろう？それにオペラ座は見るだけでも価値があるし……」

「行くのか？ 君と？」

「不服か？」

ミロはあつげに取られてカミュを見た。カミュが自分から遊びに誘うなんて。

「……いいや、全然。」

チュイルリーの庭園を抜け、コンコルド広場からロワイヤル通りに入ると、正面からマドレーヌ聖堂の雄姿が迫って来る。

ラ・マドレーヌと呼ばれるこの教会は、その色といい形といい、ギリシャの神殿によく似ていた。ミロはしばし、その壮麗な建物に目を奪われた。

「今日は金曜日だから花市が立っている筈だ」

「ふうん……。パリの色にもあんな建物が結構似合うんだな」

「少々明るさに欠けるがな。あれは神殿の姿をしていてもキリスト教の聖堂だから……」

ミロは首を傾げてカミュを見た。どうも変だ。まるでインストラクターのように自分を引き回すカミュなんて、見たことない。

「何か……。あつたのか？ カミュ」

「どうして？」

「いや……。随分と楽しそうだから。」

しばしの、沈黙。

カミュは心底驚いたような顔をした。それから口元

に手を遣ると、堪え切れないというように声を殺して笑った。

「・・・本当に判らないのか？」

「判らないって・・・何が？」

「まずまず苦しそうにして、カミュが笑う。それからやつのことで笑いを収めると、少し愉しむ目付きをして言った。

「いつ気付くか、楽しみにしているよ。それよりも食事に行こう。リュキヤ・キャルトンに予約を取ってるんだ」

高級料理店に、オペラ座。最高のナイト・コースだった。

くちくなくなった胃袋を抱えてキャシユピーヌ大通りを歩きながら、ミロは残念そうに言った。

「こんなことなら、正装して来るんだった」

カミュがミロの全身を眺め回してから答える。

「それ程ラフな格好でもないから、構わないよ。それ

に君は正装すると目立ち過ぎる」

「・・・それは御互い様だろう」

「夜の町に金髪はよく映えるからな。その位で丁度良い」

例によって、褒めているのかけなしているのか判らない口調だ。ミロは難しい顔をしたまま、前方に姿を現わしたオペラ座を見上げた。頂上に、黄金の豎琴を持つアポロン像。その上に掛かる銀の月が、古代の太陽の神を冴え冴えと照らし出していた。

「あれ・・・?」

「どうした？」

ミロは目をしばたいて神像を注視した。何だか、このアポロンは見たことがあるような・・・

「何か変な感じなんだ。全然知らない他人の記憶が混ざってきてるような——」

アポロンに目を留めたまま、首を傾げて深々と考え込む。

その時、月からの反射光がまっすぐにミロの瞳に滑り込んできた。いきなり、強い眩暈がミロを襲う。

「うわっ・・・!」

——何だ・・・？ これは・・・！——
はつきりとした既視感がミロを縛る。

「ミロ?! 大丈夫か?!」

——何故・・・？ オペラ座に来たことは一度もない

筈——

「ミロ！」

カミュの声が、ミロの頭の中でぐるぐると渦巻く。目を閉じてもおめぐる視界の中で、ミロは地底から沸き上がる笑い声を聞いたような気がした。

第二章

The FANTOM of the OPERA

一八八一年、オペラ座にて

act.1 オペラ座の邂逅

ひんやりと冷たい感触を感じて、ミロはゆっくりと目を開けた。天井には白い月が先と変わらぬ姿で掛かっている。違うのは、ミロがオペラ座の石畳の上に寝ていたことだった。

「カミュ。」

少し高めの声で呼んでみる。すぐに足音が近づいてきた。

「起きたか、ミロ」

「・・・悪い。いきなり正体不明の頭痛に襲われて——」
「私もだ。」

ミロはびっくりしてカミュを見上げた。先程とは打って変わって深刻な、カミュの表情。

「君が倒れてから、私もひどい眩暈に襲われた。それでも何とかオペラ座まで引つ張ってきて・・・気がついてたらここへ来ていたんだ」

「ハハ・・・。」

ミロは立って石段の端まで行ってみた。夜の風に、先刻までなかった悪臭が混じっている。汚れた水の臭い。・・・そう、まるで、下水管が壊れたような。

そして、眼下に想像もしなかったパリの街を見た時、ミロの両足はその場で凍り付いた。

「これは・・・！」

あろうことか。彼が気絶していたほんの数十分の間に、街は一変してしまっていたのだ。

「・・・どういふことなんだ・・・!!」

「よく注意して見てみる。街灯は全てガス灯になっているし、あれ程ひしめいていた車の影が全くない。そ

れに——」

カミュはその先を言わなかった。彼の言わんとしたそのものが、向こうからやって来るのを見たからだだった。

「……馬車！」

ミロもそれつきり息をのんで口を嚙む。一体、自分達はどうな世界に紛れ込んでしまったというのか……

「……まるで十九世紀末だ」

「現実の、だったらどうする？」

「……俺はタイムトリップなんてしたことない。」

「……その意見には私も賛成だが、そうとしか説明の付けようがない」

これでも、ミロが気づくまでの間、カミュはなるべく正確に状況を分析しようと試みたのだ。しかし、これ程常識離れた現象が起こってしまうと、それも無意味な努力のように思えた。

「あのアポロン像を見た途端におかしくなったんだ。何だか空間ごと歪んでいくような……妙な気分だった」

「以前耳にしたことがある。我々のような能力を持つ人間は、あるきっかけで時空を歪めることもあると——」
人類の生活圏内に出て来られたのはまだ救いだだった

かも知れない。カミュは大きく息を吐いた。何とかして、元の世界に戻る方法を捜さねばならなかった。

「何にしても、取り敢えず今夜の宿を捜して——」

この時、二人はまだ現実の十九世紀に紛れ込んだことを疑ってはいなかった。二人から見ればかなり時代錯誤な格好をした一人の紳士が、息を切らせてカミュに駆け寄り、その腕に抱き締めてこう叫ぶまでは。

「クリステイ——！ どこに行っていたんだ！ 二日も帰ってこないで——！」

act 2 怪人と歌姫

不覚だ。

ミロは悶々としてルイ・フィリップ調の部屋を歩き回っていた。誰も居ない、静まり返った部屋。夜の逃避行でも、この部屋には難なく辿り着く事が出来た。

ミロがバリの地理に通じていた訳ではない。彼の体が覚えていたのだ。

先刻からこつち、ミロはまったく自分の体の言いなりだった。あの紳士が駆け寄ってきた時、ミロは自分でも理由の解らないままに、咄嗟に建物の陰に身を隠してしまったのだ。

カミュがその男に手を引かれて去っていくのを見ながら。

——カミュ！ どうして……！——

声も、出なかった。小指一本さえ、ミロの意のままにはならなかった。まるで誰かがミロの身体を操っているかのように。

「くそっ！」

乱暴に置かれたブランデーグラスが、大理石のテーブルの上で碎け散る。

「落ち着け……」

息を整えながら自分にそう言い聞かせ、ミロはソファに腰を下ろした。何故カミュが『クリステイ』と呼ばれなければならないのか。そして何故カミュは彼の紳士と去り、自分は逃げてしまったのか——。

「……ん？」

誰かが歌う声が聞こえたような気がして、ミロは顔を上げた。耳を澄ましてみる。確かに、上の方で誰かが歌っている。

「歌……オペラ……？」

そうだ。自分たちはオペラ座に居たのだ。何の為に？

……『オペラ座の怪人』を観るために！

ミロはある恐怖にかられてバリの地図を引張り出してみた。自分の通ってきた道を、震える指先で辿ってみる。指が、ある一点で止まる。

「オペラ座……！」

その続きは、声にならなかった。今ミロのいる場所の真上……そここそ、オペラの殿堂そのものだったのだ。

「何て……ことだ……」

ミロは、うわごと 譫言のようにそう吐き出して唾をのみ込んだ。

ガストン・ルルーの小説『オペラ座の怪人』には、オペラ座の地下に住む怪人のことが書かれている。彼は切穴の名人であり、魔術を使うように人を殺すという。勿論、それは物語の世界のことなのだが、その骨格はオペラ座の幽霊伝説から生まれたという話

だった。

——まづいな……——

自慢ではないが、幽霊の類は得意ではない。実体があるなら叩きのめすことも出来るが、相手が空気をたいに頼りないのでは手の打ちようがない。怪人だか幽霊だか知らないが、見付からないうちに退散しようと考えて、ミロは凍りついたようにその場に立ち止まった。

あの時……紳士は何と言った？

「……クリステイ……」

クリステイとは、クリステイ・ヌの男性形ではないのか。そしてカミュは——そう呼ばれてその手を取ったのだ！

「まさか……まさか……！」

ミロは鏡台へ駆け寄った。鏡の中に白い顔が浮かび上がる。

それはまさしく、地獄の怨火に焼かれた死人の顔だった。

「クリステイ、悩みがあるなら僕に話してくれないか」

ラウル・ド・シャニユイ子爵は昨晩、二日間行方不明になっていた恋人をやつとのことと捜し出した。ところがその恋人ときたら、何かを考え込んだまま、ろくに返事もしないのだった。

「クリステイ……君がいない間、どれだけ皆が心配したか！」

「すみません、子爵……ですが私にも、何処に居たのか分からないのです」

「どこにいたのかわからない？」

「ええ。しかも、何かとても大切なことを全て忘れてしまったようで……」

二日ぶりに入った暖炉の熱が、ふわりと部屋を包む。揺れる蠟燭の光が、俯く白い顔を照らし出していた。

「……そうなのか？ でも僕には今まで通りの君に見えるよ、クリステイ」

「その名前もなんです！」

子爵はびつくりした様に恋人を見つめた。一体彼は、何を言うつもりなのだろう。

「それは確かに私の名前なのに……私にはもう一つ名前がある筈なんです」

「どんな？」

「確か、『カミュ』という……」

「……そんな話は聞いたことがないな。君からも君の父上からも。どうしてそう思うんだい？」

「それが……」

クリステイと呼ばれた青年は、悲しそうに下を向いた。

「分からない……。覚えていないんです」

子爵が小さく溜め息をつく。

「……疲れているんだよ、クリステイ。少し舞台は休んだ方がいい。勿論レッスンも——」

「いいえ！」

自称『カミュ』は、迷いを振り切るように立ち上がった。

「音楽の天使が降りて来てくれるのです。休む訳にはいきません」

「いい加減にしなさい！ その音楽の天使は、実はオペラ座の怪人だというじゃないか！ 君は騙されているんだ！」

「でも、彼は私に音楽をくれた！」

「クリステイ……まさか怪人を愛しているのか?！」

子爵が、溢れる感情を抑え切れずにカミュに詰め寄る。カミュは、赤くきらめく双眸でラウルを見つめた。

「いいえ！ 私が彼に対して抱いているのは、感謝と……恐怖だけです」

言葉を伴わない視線だけの応酬が、つかの間の時を支配する。

「……それじゃ僕は……?」

やがて、急に力の抜けたように崩れ落ちて、子爵はカミュの膝に顔を埋めた。

「結局は僕も、片思いなのか……?」

やるせない眩きが、カミュの胸に突き刺さる。カミュは沈痛な面持でじつとその姿を見下ろしていた。

「……ラウル……」

act.3 舞台裏じ

夜が明けた。ミロはオペラ座の地下で——正確には
ルイ・フィリップ調の部屋にある鏡台の前で、一夜を
過ごした。

何のことはない。気絶していたのだ。

「畜生！」

ミロは側にあつた銀の燭台で鏡を叩き割つた。自分
で見るのもおぞましいその鏡像は、銀色の硝子と共に
粉々に碎けて散つた。

「さて……どうするかだな」

怪人らしく蠟造りの仮面をつけて、深々と考え込む。

一晚過ぎて、ミロにも少しづつ事の次第が飲み込め
てきた。

自分は怪人になり、カミュはクリステイヌ・ダー

エになつた。つまり自分達は、『オペラ座の怪人』の
主役二人になり代わつてしまつたのだ。

「いかれてやがる……！」

タイムトリップならともかく、物語の世界に入り込ん
でしまふなんて！

聖闘士としての力は、何一つ使えなくなつていた。
勿論、テレパシーも通じなかつた。そしてその代わり
に、オペラ座の怪人ことエリックの記憶が、ミロの頭
を占領していた。

「つまり俺たちは同調シクロしたつて訳か……」

同調。本質的に似たものが、共鳴を繰り返し同一化し
てしまふことである。

随分とややこしい事態であつた。それはこのたつた
一つの身体を、ミロとエリックの両方が支配している
ということに他ならないのだから。

ミロは仮面を僅かにずらし、もう一度顔に触つてみ
た。醜く歪んだその皮膚が自分のものではないことが、
今度ははっきりと感じられた。例えて言えば自分の皮
膚の上に他人の皮膚が張り付いているような——
外せない仮面が取りついているような感じなのだ。

「冗談じゃないぜ。何とかしてこの同調を解いて元の世界に戻らないと……」

カミュはどうしているだろう。ミロは、エリックの命ずるままに樫の木の扉を開けると、迷路のように入り組んだ道を一度も迷うことなく舞台裏の楽屋へと進んでいった。

カミュはじつと俯いたまま、長い間その瞬間を待っていた。

つい先日まで無名の声楽家だったクリステイは、丁度三か月前に音楽の天使に出会ったのだった。この世界の誰もがなし得ない美しい声で、豊かな情感を持って歌う一人の天使に。

「違う……あれは——」

けれど今、彼は知ってしまった。天使が実は一人の人間であり、しかもその顔は見るも恐ろしい程に赤黒く爛れた、恐るべき殺人鬼であることを。

「エリック……不憫な……」

もしも怪人の顔が人並みであったなら、彼は本当に音楽の天使たり得たのではないのか？

クリステイはエリックの姿とその殺人技術を忌み嫌い、一方で彼の音楽の才を崇拜していた。事実、神はエリックに人並みの容姿と引換えに、誰にも到達することのかなわぬ天賦の才を授けたのだった。

では、『カミュ』は？

「ラウル・ラウル……私には分からないのです……」
奇妙なことに、カミュの方はカミュ自身の記憶を失ってしまった。あの夜、ラウル・ド・シャニユイ子爵の手を取ったあの瞬間から。

——カミュ……君は……——

音楽屋に掛かっている大きな鏡の裏から、ミロはその様を見つめていた。表から見れば普通の鏡に過ぎないそれは、裏から見ると向側が透けて見える硝子としての性質も合わせ持っていた。二十世紀に生きるミロはマジック・ミラーという言葉を知っているが、この時代——十九世紀ということを考えると、これはエリックの『発明』なのに違いなかった。

——君も子爵に惹かれているのか……？——

クリステイヌ・ダーエのように。

きりつと、胸の奥が痛んだ。その痛みに耐えるように、ミロは唇を噛み締めた。オペラ座の怪人は、一人の名もない歌姫に恋をする。そして自分の才能のすべてを捧げて、歌姫を名ソリストに育て上げる。しかしその時すでに、歌姫には幼馴染みの思い人がいるのだ。そして――

――あれ？ それからどうしたんだっけ・・・？――

ふと、ミロはその先の記憶が途切れていることに気付いた。きつと、自分が登場人物の一人になっているから、判らないのだろう。

――くそつ、なるようになれ・・・！――
たとえ結末の決まった物語であろうと、登場人物が動かなければ話の進行しよう筈もない。ミロは、半ば自暴自棄になつてエリックに自分の体を委ねた。

『そんな悲しそうな顔をしないで、クリステイ・・・』
「・・・エリック？」

『今度のオペラは君が主役になる。道ならぬ恋に苦しむ修道士・・・君以外にはこなせない・・・』

「エリック！ もういい！ 私は自分が解らない・・・オペラなんて！」

『だめだ！ 君には才能がある・・・完璧なりりこ・アクトー―― 本当はオペラなんてどうでも良いのだ、クリステイ。君の声はもつと崇高な音楽を歌う為にあるのだからね・・・だがその前にまだまだ磨き抜かれなければならない！』

驚いたことに、ミロの喉はこの世のものとも思えない妙なる調べを紡ぎ出したのだ。自分で自分の耳を疑う程の。

――これが『怪人』の歌・・・？――
カミュが対旋律を合わせてくる。典礼聖歌の良く似合う、澄んだ歌声。

運命がおまえを永久にわたしに縛る・・・
二つの旋律が互いに追いかけ合い、絡み合う。時の経つのも忘れて、いつしか二人は同じ感動を共有していた。

――カミュ！――
エリックがクリステイの名を叫ぶのと同時に、ミロも

また胸の内で叫ぶ。その瞬間、ミロは自分たちが決して二人ではないことを悟った。

ミロとエリックは、似ているからこそ同調したのだ。

運命がおまえを永久にわたしに縛る……！

ミロは鏡の切穴を開け放った。

「さあ、来るんだクリスティ……もう一度、私の王

国へ！」